

未来の オンライン

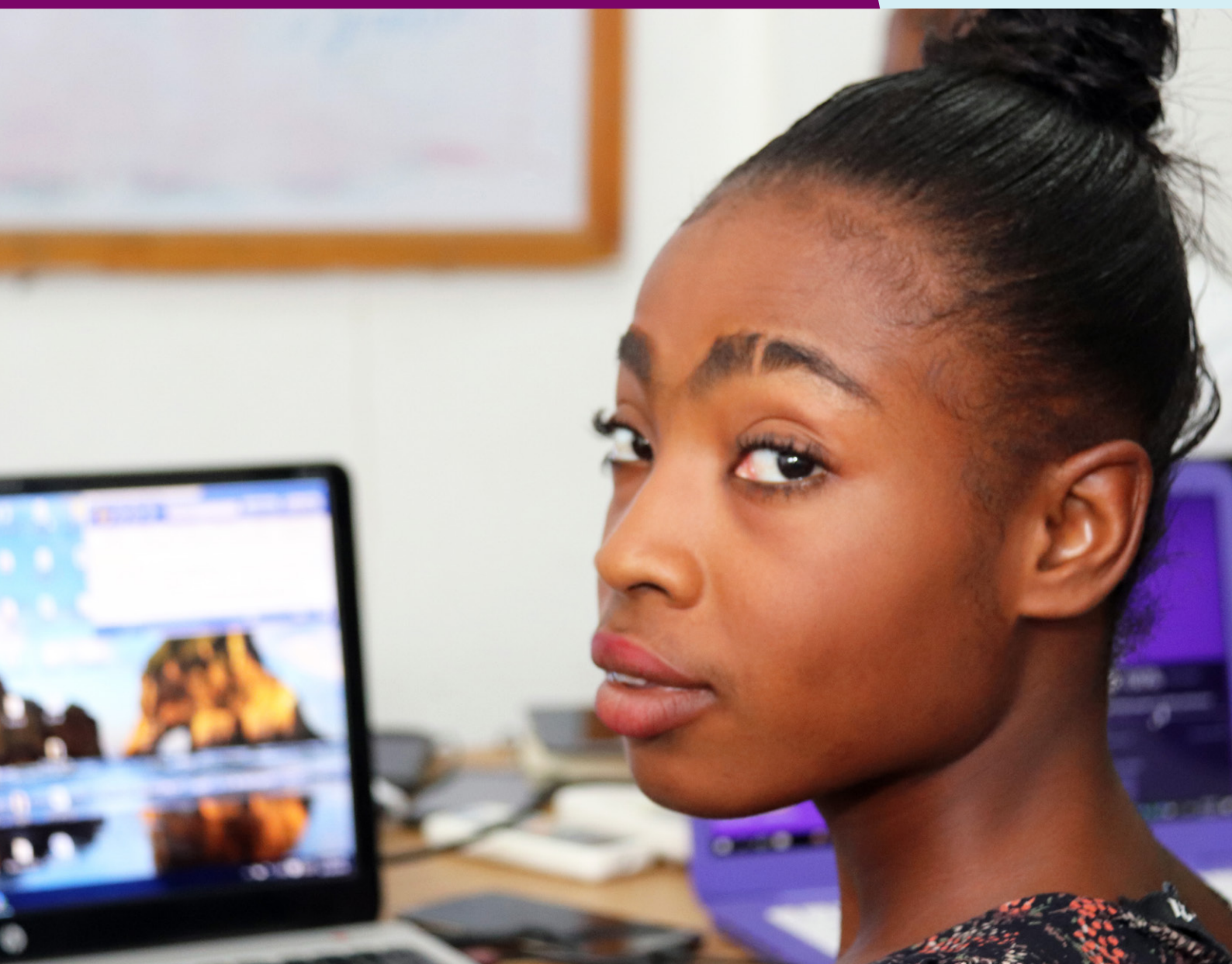
YAS

YOUTH ACTIVIST SERIES

THE BODY SHOP

PLAN
INTERNATIONAL

The charity for
girls' equality





序文

Olivia - オーストラリアのユースアクティビスト兼レポートチームメンバー

教育やコミュニケーションの場として安全に利用されるべきスペースで、誹謗中傷からサイバーストーカー、性的搾取に至るまで、深刻な暴力行為が発生し、世界中のユースに破壊的な影響を与えています。

女の子や多様なジェンダーを持つ人々は、人種、ジェンダー、セクシュアリティ、外見を理由とするオンライン上のハラメント、脅迫、虐待に絶えずさらされています。2020年、プラン・インターナショナル・オーストラリアの「Free to Be Online」(「女の子にオンライン上の自由を」)調査によると、全調査対象22カ国の女の子の58%が、ソーシャルメディア・プラットフォーム上で何らかのオンライン虐待を個人的に経験したことがあることがわかりました。インターネットを利用する女の子たちが危険を感じるなどあってはなりません。

ウェブ上では、その場を共有している傍観者と自ら手を下さ者の境界線が曖昧になりがちです。オンライン上の有害なコンテンツに対する説明責任は、しばしば作成者以外にも及びます。誰かを辱めたり傷つけたりすることを目的としたオンラインソースをフォロー・購読・宣伝することが、いじめや虐待行為と呼ばれることさえあります。

傍観者が介入するという考え方は、人を助けるのと同じくらい単純なことです。行動する傍観者(Active-Bystander)は、オンライン上の虐待を目にした時、自ら事に当たるものです。

オンライン空間はその広さゆえに、利用者は強い匿名性を感じて責任感が軽くなりがちです。この報告書は、悪化の一途をたどるオンライン上の暴力と闘うために行動する傍観者を増やし、より安全で包摂的なオンライン空間を目指すことを目的として作成されました。

オーストラリア、インドネシア、ベトナムのユースアクティビストとの共同作業は、素晴らしい機会になりました。報告書の作成を通して、私たちはお互いの意見やアイデアについて話し合うことができ、またそれぞれの国の類似点や相違点を知ることができ、心がときめきました。インドネシアとベトナムに暮らす女の子と女性たちの独特の経験を垣間見ることができたこと、そして私たちの国の仮想空間に強力な影響を与えるような解決策を練ることができたことが、心から楽しかったです。

今回のプロセスを通して、ネット上で暴力行為が蔓延している実態、そしてそれに対処する上で行動する傍観者がいかに重要な役割を担っているかに気づかされました。私は、ユースアクティビストが作成する報告書の一翼を担うことができたことを誇りに思うと同時に、あらゆるジェンダーとアイデンティティを持つ人々にとって公平で、安全で、包摂的なオンライン空間のある未来の到来がとても楽しみです。

このプロジェクトを率いるユースのチームを紹介：

インドネシア

Vania (彼女)
Maya (彼女)
Naila (彼女)
Agni (彼女)
Chiki (彼女)
Mistry (彼女)
Amanda (彼女)
Fayanna (彼女)
Lily (彼女)

ベトナム

Chi Ngô (彼女)
Thảo T (彼女)
Nhi L (彼女)
Thảo N (彼女)
Nhi B (彼女)
Nhưng C (彼女)
Thủy P (彼女)
Chi Nguyễn (彼女)
Tiên N (彼女)

オーストラリア

Harleen S (彼女)
Sandhya DT (彼女)
Elizabeth L (彼女)
Siena B (彼ら)
Olivia C (彼女)
Jazmin Wn(彼女)
Kayshini L (彼女)
Margaret T (彼女)

名言

「いじめ、そして人々を傷つける多くの悪事が今もネット上で毎日起きています。その根本にあるジェンダー不平等や女性を常に物のように扱うなど、その他の文化的規範やリアルな生活で正当化されていることに、私たちは打ち勝ったことはありません。そのため、プラットフォームが制限がなくなってしまうたら、規範など見境なく望むままに行動することも難なくできるようになります。自分を表現する方法が間違っている場合もあるかもしれない。でもその行動を担っているのは私たちなのです。通報や応援メッセージを送るといった単純なことに大きな意味があるのですから。」

– Naila、19歳、インドネシア

「私のささやかな行動が、最も文明的で、最も安全で、最も幸せな社会の実現につながることを願っています。そこでは、ソーシャルネットワークが、あらゆる困難をみんなで共有でき、共感と励ましを得られる場所になるでしょう。」

– Chi Ngô、18歳、ベトナム

「将来ジェンダー平等と平等な世界が実現するためには、オンライン上の安全は間違いなく何よりも重要です。私たちの生活や職場でのオンラインへの移行がすすむにつれ、インターネットが安全な場所であるために規制と教育をすすめ、知識を深め、行動することが常に求められています。今後、デジタルとオンラインのリテラシーと安全性が、地球上でもっとも大きな問題のひとつになるでしょう。ユース、特に女性のインターネット上の安全に関して、私たちは問題が起きてから対応するのではなく、問題が起きる前に行動を起こさなければなりません。このプロジェクトをつくるのは、未来を見据えるユースアクアティビスト集団です。政府は果たしてついてくることができるでしょうか。」

– Margaret T、21歳、オーストラリア

要約

オンライン上では、世界中のユース、特に女の子と多様なジェンダーの人々が身体的脅迫、人種的虐待、セクシャルハラスメント、ボディシェイム(身体的特徴に関する辱め)を受けているが、それは、彼らが声を上げ意見を共有することで一層悪化する。ネット上での暴力とハラスメントが深刻化し、実害をもたらすなか、本来自由であるはずのオンライン上でユースたちはその声を抑え込まれている。

私たち全員が行動を起こし、ネット上で目にするユースに対するジェンダーに基づく暴力(GBV)とハラスメントを訴えたら、世界はどれほど変わるだろうか。

15~25歳のユースの集団としてベトナム、インドネシア、オーストラリアから結集した私たちの目的は、行動する傍観者が介入し、ソーシャルメディア・プラットフォームを改革することで、ユースがネット上で受けているGBVとハラスメントに歯止めをかけることができるか、その可能性を探るプロジェクトを考案し、主導することだ。

私たちはユース中心のモデルを用いてプロジェクトの指針となる質問を考案し、同世代の仲間とともにフォーカス・グループ・ディスカッション(FGD)を行い、現在、変革のためのキャンペーンを行っている。

このプロジェクトで私たちはこう問いかけた。

...

あらゆる多様性を持つユースに向けられたオンラインGBVを目にしたときに行動を起こせるよう人々を導き、支援するためには何が必要なのか。

...

私たちの調査結果、提言、行動へのアイデアは、変革は可能であること、そしてシステムの変革が必要なだけでなく、変革を担うのは私たち一人ひとりであることを示している。

主な調査結果と提言

- ・オンライン上の暴力とハラスメントには、文化的規範とジェンダーステレオタイプ、この問題についておざなりな取り組みしかないソーシャルメディア・プラットフォーム、時としてこの問題の源にもなりうるソーシャルメディア・インフルエンサーの存在、そして世界的パンデミックなど、さまざまな要因がある。
- ・強力な変革の担い手であるユースには、行動する傍観者としてその力を発揮する可能性があるが、そのためには教育、ツール、支援が必要である。人々に行動する傍観者となる力を身に付けさせる上で、教育制度とソーシャルメディア企業は大きく重要な役割を担っている。
- ・行動する傍観者のための教育とリソースは、ユースと共同で設計し、被害者/経験者の声を中心に据えた時にもっとも効果を発揮する。またそれは、GBVとハラスメントの根本原因に対処する、トラウマに配慮したアプローチをとる、傍観者が精神衛生面で受ける影響に取り組む、傍観者としてどのような行動がとれるかについてのツールキットを提供するなど、包括的なものでなければならない。

私たちは求める:

- ・教育省は、オンライン上のGBVとハラスメントに対処する包括的なデジタルリテラシー教育を(ユースとともに)開発・実施し、暴力とハラスメントを経験しているユースと行動する傍観者を対象にした精神衛生上の支援プログラムを提供する。
- ・ソーシャルメディア企業は、傍観者に関する情報へのアクセスや各地域の支援制度へのリンクなど、さまざまな対策を実施する。多様な経験を持つユース(LGBTIQ+のユース、有色人種のユース、先住民のユースなど)にとってより安全なオンライン空間を作り、プラットフォーム上でのGBVとハラスメントを根絶するための明確かつ積極的な措置を講じる。



プラン・インターナショナルは、ギニアビサウでGirls Out Loud活動(現地名「nha fala」)を開始した。女の子とユース女性とともに、ジェンダーに関する重要な問題について議論できる安全なオンライン空間を設けた。
写真: Tânia Pereira。

はじめに

「ネット上で時間を過ごすユースが増えるにつれ、ユースに対するハラスメントと虐待が間違いなく増えています。ただの退屈のぎの人もいて、必要がなくてもソーシャルメディアでほとんどの時間を過ごすなか、ネットが最も簡単に人を中傷する手段になっていると、みなが感じています。昨年以降、人種差別の増加も見られます。」

—ユース、ピアフォーカスグループ参加者、オーストラリア

COVID-19パンデミックの影響により、世界中の人がかつてなく多くの時間をオンラインで過ごすようになった。私たちは互いにつながりを保ち、自宅で仕事や勉強をすることができるようになった一方で、オンライン空間におけるジェンダーに基づくハラスメントの数も増加している。これは確かに新しい問題ではない。しかし、私たちの日常生活がほとんどオンラインで成立する現在、「ただスイッチを切る」という選択肢はもはやありえない。私たちがオンライン環境を切り離せない以上、オンライン環境が変わらなければならないのだ。

ユースは、オンライン空間が安全だと感じられないこと、そしてそれに対してただ手をこまねいているソーシャルメディア企業に嫌気が差している。プラン・インターナショナルでは、ユースは自身に直接影響する問題の解決策を生み出せる存在であり、このプロジェクトによって、オンライン・ハラスメントに正面から取り組み、新たな道筋に向けた解決策を提案することができると信じている。それを実行するために、オーストラリア、インドネシア、ベトナムのユースアクティビストが結集し、オンラインの未来の姿を提示した。

特にオンライン空間やソーシャルメディア・プラットフォームの安全性を高める手段として、**オンライン空間で行動する傍観者が挙げられた**。傍観者は、オンライン上の暴力の被害者・経験者、標的になっている者が孤独や沈黙を強いられることなく、周囲の人に支えられていると感じられるようにする上で、きわめて大きな役割を担っている。オンライン上のコミュニティがGBVを見たときに立ち上がり、声を上げるよう働きかけることが、解決策の半分。同時にソーシャルメディア企業に圧力をかけ、あらゆる多様性を持つユースを受け入れる、安全性と包摂性の高いプラットフォームに改革させることも必要である。

このパワフルなユースの集団は協力して、行動する傍観者が介入すると合わせてプラットフォーム改革を行うことで、いかに変革の力となりうるかを明らかにするために、このプロジェクトを企画した。ユース中心のモデルを通じて、参加者はプロジェクトの指針となる質問を設計し、同世代の仲間とともにFGDを実施し、現在、変革のためのキャンペーンを行っている。

オンライン上の新しい未来は実現可能であり、このプロジェクトはその道筋を示している。

オンラインGBVとハラスメントの定義

オンライン上のジェンダーに基づくハラスメントの定義は数多くあるが、本調査では、プラン・インターナショナルの「Free to Be Online」報告書に沿って以下を使用した: 「性自認またはジェンダーアイデンティティに基づいた、あるいは有害なジェンダー規範を強制することによって、一人または複数の人々が他者を傷つける行為。この行為がインターネットと/あるいはモバイルテクノロジーを使って行われ、その中にはストーカー行為、いじめ、ジェンダーに基づくハラスメント、中傷、ヘイトスピーチ、搾取、ジェンダーに基づくトロリング(荒らし: オンライン上の人々の会話を荒らす行為)などが含まれる。

COVID-19の影響

COVID-19パンデミックと、それに伴う規制により、オンライン上にいることの重要性はかつてないほど高まっている。家庭で孤立している人にとって、オンラインの世界が命綱になる場合もある。特に、学業についていくのに苦労していたり、友人とつながったままのユースにとって、その存在はきわめて大きい。

残念なことだが、より多くの時間をオンラインで過ごす人が増えるにつれ、オンライン・ハラスメントは増加している。オンラインで過ごす時間を長くするために、ユーザーをより多くのコンテンツにつなげようと、通常の興味やコミュニティ、価値観から外れたものをソーシャルメディアのアルゴリズムで次々と見せるために、この状況はさらに深刻化していると、ユース参加者たちは考えた。

ユースがオンライン上での人種差別に遭遇することが増えており、白人至上主義者やオルタナ右翼が目に見えて存在感を強めていると感じて人種差別に反対する発言をするとハラスメントと虐待を受けている。この空間には節度が足りない、存在しないとさえ思える一方で、人々、特に女性が自分の身体の画像、あるいは性的なサービスについての発言を理由にシャドウバン（SNSの運営側が悪質と判断したアカウントに対して制限を課すこと）されるのを見かけると、ユース参加者らは述べた。

またパンデミックによって、私たちがオンラインで過ごす場所が変わり、新たな形のオンライン・ハラスメントを生まれた。たとえば、2020年に会議、講義、その他の集会在オンラインになると、しっかりとしたセキュリティ対策やプロトコルがないのに乗じて白人至上主義者が集会に入り込み、ヘイトや人種差別の画像やシンボルを見せる「Zoom爆撃」が相次いだ。

2020年の「国際ガールデー」に向けて、プラン・インターナショナルが世界に向けて発表した報告書『[Free to be Online](#)』では、女の子とユース女性がオンライン上でどんな経験をしているかを調査し、半数超がソーシャルメディア上でハラスメントや虐待を受けたことがあることが明らかになった。不適切行為を通報する仕組みがプラットフォームに整っていないことが、ハラスメントの見過ごしに一役買っている実態が浮き彫りになった。

プラン・インターナショナルは、報告書の発表と同時に世界的なキャンペーンを開始し、ユースの声に耳を傾け、通報の仕組みを改革するようソーシャルメディア企業に請願した。しかし、キャンペーンはここで終わりではない。世界中のユース、特に女の子、ノンバイナリー、多様なジェンダーのユースが直面している課題は、通報メカニズムをはるかに超えた域まで広がっている。

街角でマナー向上を呼びかける啓発キャンペーンが盛んに行われているように、私たちはオンライン空間が提供すべき機会へすべてのユースが平等かつ十分にアクセスできるように、オンライン空間を誰にとっても安全性の高い居心地の良いものにするために行動する力を人々に与える必要がある。



Nisha, 17歳、ネパール。

エクアドル出身のYomira(20歳)は、携帯電話を使ってオンライン研修コースに参加している。

背景

傍観者とは

傍観者の介入とは、オンライン上のGBVとハラスメントを目にした人々に力を与え発言を促すことで、暴力とハラスメントの文化を変革していくことだ。

デスクレビューを通じ、傍観者の介入には5つの重要なステップがあることがわかった。

- 1) 間違っていると思う状況に気づく
- 2) この状況には介入が必要だと理解する
- 3) 自分にはこの状況に介入する責任があると判断する
- 4) どのように介入するかを決める
- 5) 自分が適切と考える方法で介入する能力または余裕を持つ(Patterson, Allan, Cross, 2016)

傍観者のあり方もまた、役割に応じて分類することができる；状況に気づいていながら何も行動を起こさない「外野」、投稿に反応したり再共有したりすることでいじめやハラスメントを助長する「煽り役」、いじめを始めはしないが自身のコメントや投稿を通して加担する「補佐役」、積極的に被害者を擁護する「味方」である。(QuirkとCampbell, 2015)。

なぜ傍観者が介入するのか

傍観者が介入しようと思うかどうかは、多くの要因に左右される。傍観者の数には、オンライン上の匿名性と並んで影響力がある。傍観者が多ければ、誰かが介入してくれる、あるいは自分が介入する必要はないと傍観者が感じるため、責任感が薄まるからだ(BrodyとVangelisti, 2016)。

被害者との距離感は、傍観者が介入する強い動機となる。調査によると、単なる知り合いではなく親しい友人や家族など被害者との距離が近ければ近いほど、傍観者が介入する可能性が高まる(BrodyとVangelisti, 2016)。その状況の緊急性や傍観者個人の道徳観など、その他の要因も関係する(Patterson, Allan, Cross, 2016)。

ネットいじめとハラスメントに対して、傍観者は、反論する、加害者にやめるよう求める、他のリーダーや同世代の仲間、権威ある人に介入を求めるなど、さまざまな手段で対応する(AHRC, 2013; PowellとHenry, 2015)。

概して行動する傍観者の介入は、標的になっている者を前向きにする効果があり、暴力の影響が軽減される。(MoxeyとBussey, 2020)。

だが、オンライン・ハラスメントといじめを目撃して介入した結果、傍観者が精神衛生上影響を受けるという調査結果もある(Mazzone, 2020; Joint Select Committee on Cyber-Safety, 2011)。

被害者と並んで傍観者も、自信を持っていじめやハラスメントに立ち向かうことができるよう、精神衛生上の支援とともにスキル習得の支援を受ける必要があるとの提言が行われている(Mazzone, 2020)。

行動する傍観者を支えるためのリソース

ユースが行動する傍観者になることの重要性を理解し、行動する力が身についたと実感できるようにする上で、デジタルリテラシーとオンライン上の安全に関する、既存のリソースは適切であるとは言えない。

オンライン・ハラスメントに関する傍観者のためのリソースは大半が、小学校高学年から高校低学年を対象とし、同級生間のネットいじめに焦点を当てたものだ。

ここでは、標的と面識のある者によるハラスメントに焦点が当てられているわけだが、これは、興味深いことに『Free to Be Online』での調査結果とは一致していない。この調査では、ユース女性と女の子に対するハラスメントを行う3大集団は、見知らぬ人(36%)、匿名のソーシャルメディア・ユーザー(32%)、友人ではないプラットフォーム上の人(29%)であった。このため、大きな割合を占める見知らぬ人によるハラスメントにどう対処するかについて、生徒の教育に不足が生じている。

ユースがネット上で経験するハラスメントと暴力行為を表現する際に使われる用語にも問題があった。若者は、ネットいじめを愚かだ、卑劣だが深刻なものではないと考えているが、これは表現が時代遅れになっているためかもしれない(Joint Select Committee on Cyber-Safety, 2011)。性的虐待、ストーカー行為、ハラスメントは大人の事例で使われることが多く、ネットいじめとは別物と考えられており、両者の経験にずれが生じていた。

オンライン・ハラスメントは確かに目新しいものではないが、傍観者がどう行動すれば暴力を止められるかを概説した既存の調査は大半が、対面で起こるいじめの事例に基づいていることがわかった。

このことから、ユースのデジタルリテラシーを向上させるためのリソースは存在するものの、オンライン上で起こるハラスメント特有の形について現代的な理解が欠けていることがわかる。また、利用可能なリソースがあまりにも広範で、暴力行為や傍観者の介入がプラットフォームごとに違う形で行われていることを示さず、どのオンラインプラットフォームも同様に扱っているため、生徒が対処できない状態に陥っている。全般的に、ユース中心のアプローチは既存の文献で提案されているが、私たちが分析した調査やリソースの中には、ユースと共同で設計されたものはなかった。

エビデンスの不足を補う

このプロジェクトの目的は、ユース中心のアプローチを活用することで、ユースがオンライン空間に求めていることの核心に迫り、オンライン上のGBVを減らす上で傍観者とソーシャルメディア・プラットフォームが担う役割を考え、こうした不足を補うことだ。また、LGBTQIA+のユース、オーストラリア先住民、倫理的・文化的に多様な人々、障害者などの特定の集団のニーズを考慮するだけでなく、ジェンダーの視点を持つことで、既存の調査から排除された声をすくい上げることも目指している。



ベトナムの女の子はパソコンを使ってオンライン研修にアクセスしている。
写真: An Nguyen Quoc

質問

オーストラリア、インドネシア、ベトナムから参加したユースは、オンライン空間でユースが直面している問題を探るために結集した。彼らは、傍観者の介入が与える影響を調査し、それを足掛かりにユースにとってより安全なオンライン環境を作るために、共同で質問の考案に当たった。

調査テーマ

ネットいじめに限らず、ネット上でユースが受けているハラスメントと虐待は、多くの場合、仲間だけでなく、面識がない、あるいはつながりの薄い個人によるものである。

世界的なパンデミックの中、オンライン上で学び、時間を過ごすユースが増え、今やオンライン上にGBVは蔓延している。そして多くの場合、そこにはソーシャルメディア・プラットフォーム上で大きな影響力を持つ「ロールモデル」やインフルエンサー、人気者の存在があり、その一方でユース主導の包摂的でプラットフォームに特化したリソースへのアクセスはないために、深刻化がすすんでいる。そうした背景から私たちは、

...
あらゆる多様性を持つユースに向けられた
オンラインGBVを目にした時に、行動を起こせるよう人々を導き支援するには何が
必要なのか？
...

という問題を取り上げる。



ドミニカ共和国のアーティスト @mrpichonは、オンライン・ハラスメントと、それが女の子とユース女性に与える影響について啓発するために、このイラストを制作した。

主な調査結果

このプロジェクトで得られた調査結果は、ユース参加者がピアFGDとデジタル検証を通じて収集・分析したデータに基づき、ハラスメントの原因、傍観者の力の活用、傍観者の支援という大きく3つに分類することができる。

ユースに対するオンライン・ハラスメントはなぜ起きているのか？

オンライン・ハラスメントと闘うためには、その原因を理解することが重要だと考える。COVID-19からジェンダー規範、インフルエンサー、ソーシャルメディア・プラットフォームまで、こうした原因が絡み合いながら複合的に作用している場合が多い。多くは、これまでの生活で身についた社会規範や信念、あるいはそうした規範と信念が生み出したものが原因になっている。今後時を重ねれば、こうした物が身につかないようにすることはできる、と私たちは信じている。

COVID-19

オーストラリアとインドネシアの参加者は、COVID-19パンデミックの影響で、仕事や勉強、交流の場がオンラインに移行していることが、オンライン・ハラスメントの一因であると考えた。ユースはオンライン利用時間が長く退屈なことも、オンライン・ハラスメント増加の一因であることを突き止めた。ロックダウン中の生活の多くがオンラインで行われていて、ログオフできないことが、ハラスメントや暴力的なコンテンツは避けられないと思われる大きな要因だと見られた。

ソーシャルメディア・インフルエンサー

オーストラリアとベトナムからのユース参加者は、有名人やインフルエンサーなどネット上の人気者が、ネット上におけるGBVの蔓延や扇動に一役買っていることを強調した。

社会的に重要な問題について発言する際、彼らの本心と受け取られることもあれば、社会の期待やトレンドに応えたものだと受け取られることもあった。たとえば、2020年の「Black Lives Matter(訳注: 黒人に対する差別や人種差別、警官による黒人への暴力に反対する運動のこと)」をめぐるネット上の発言では、インフルエンサーがこの運動を支持する投稿をしなければ、人種差別や性差別の制度に加担していると非難される事態に陥った。このように真意をつかみかねる点だが、ユース参加者がオンライン上で暴力に反対する声を上げるという自分の役割に強い警戒心を抱く理由である。

「ロールモデルが、とりわけユースに与える影響力は非常に大きいです。しかし、彼らがGBVや差別について発言するにふさわしい人物であるとは限りません。また、ロールモデルが無知である例もあまりにも多い。彼らの多くは、イメージアップにつながる都合の良いトレンドに乗っかっていますが、この問題に取り組む意図や考えがあるとは言えません。「発言したならもっと行動で示す」必要があると、私は思います。」

— ユース、ピアフォーカスグループ参加者、オーストラリア

ソーシャルメディア・プラットフォーム

オーストラリア、インドネシア、ベトナムのユース参加者は、ソーシャルメディア・プラットフォームが、ユースがネット上で経験するハラスメントに大きな役割を果たしていると述べた。

また、早い段階で通報しても意味がないとユースに感じさせることがないよう、通報の透明性を上げ、適切なフォローを行う必要性を指摘した。

参加者はさらに、ソーシャルメディア企業が資本主義や暴力的なコンテンツとハラスメントを誘発するようなコンテンツを助長するビジネスモデルを過度に追求していることも大きな要因になっていると指摘した。

オーストラリアからの参加者は、プラットフォームの安全性を高めようとInstagramが感度フィルターを実施した結果、有害なコンテンツ以外にも、自分が経験した暴力やハラスメントを共有するアクティビストや被害者・経験者のコンテンツも制限するという、お粗末な事態を招いたことを振り返った。

オンライン・ニュース企業が、特に女性やその身体に関連する記事のタイトルで(ユーザーの興味・関心を刺激してクリックを誘導する)クリックベイトを用いることは、侮辱やハラスメントを生む環境を助長しているとデジタル検証で指摘されたが、ニュース企業は加害メッセージに対するその説明責任にはほとんど触れなかった。

文化的規範

すべての国の参加者が性差別、有害な男性性、人種差別、同性愛嫌悪などジェンダーに基づく暴力の根本原因として数多くの文化的規範を挙げた。

また、多くの場合こうした要因が絡み合いながらネット上のハラスメントがさまざまな形で深刻化している実態についても議論がなされた。

インドネシアでは、参加者はジェンダー表現にまつわる保守的な考え方に焦点を当て、「セクシー」とされる服装で写真を投稿した女性は「ハラスメントを求めている」とみなされるという女性に対する有害なステレオタイプがあることを明らかにした。また、被害者にとって重要な人物が加害者であるケースでは、力関係もGBVに影響を与えていることが指摘された。

オーストラリアとベトナムの参加者は、加害者が言論の自由を盾に、ネット上での他者へのハラスメントを正当化していることも明らかにした。言論の自由とは何かをめぐる混乱、教育不足、誤った情報が、オンラインGBVを引き起こしていると考えられた。

「ネット空間では、私たちはよく"休め"とか"ログオフしろ"と言われます。特に、人が生活の大半をオンラインで過ごしている今、「休む」という対応はもはや適切だとは言えません。言論の自由(ハラスメント)を認めるために、こうした空間から距離を置くことはできないし、無理やり距離を置かされることがあってはなりません。」

— ユース、ピアフォーカスグループ参加者、オーストラリア

どうすれば行動する傍観者になるようユースを導くことができるのか？

「自分が正しいと思うことのために立ち上がる。それが誰かにとって都合の悪いことだとしても、その行動が本当に間違っているかどうかを考える。間違っていないなら、自分の立場を貫くこと。」

— ピアフォーカスグループ参加者、インドネシア

ユースを行動する傍観者になるよう導くには、以下のことが必要だとわかった。

- ・ 行動する傍観者とは何かを知る；
- ・ そうなるための最善の方法を学ぶ；
- ・ ユースの行動を支援する環境をつくる。

ユースがオンラインGBVとハラスメントに立ち向かうための力を身につけるには、ソーシャルメディア企業と教育制度の連携がきわめて重要である。

ソーシャルメディア企業

傍観者の力を借りるという点で、オーストラリアとインドネシアのユース参加者は、ソーシャルメディア企業がユーザーの反応を具体的に予想し、彼らが行動する傍観者になった際に利用可能な選択肢を明確に示す必要があると指摘した。というのも、傍観者が介入する形は、コメント、「いいね!」、ダイレクトメッセージ、リツイートなど、プラットフォームによって大きく異なっているからだ。投稿者本人が標的になっているのか、あるいは投稿が第三者によるものかによってアドバイスは変わる。

教育

自分に介入する力があると感じて、行動する傍観者になるためには、性差別、人種差別、同性愛嫌悪など、オンライン・ハラスメントの根底にある原因について教育する必要があると、すべての国のユース参加者が強調した。

インドネシアとベトナムの参加者からは、ユースは教育不足のために自分が他のソーシャルメディア・ユーザーに対してハラスメントと受け取られかねない行動をとっていることに気づかないことが多いとの指摘があった。このことから、ネット上でのジェンダーに基づくハラスメントとは何かということ、そして行動する傍観者としてそれに立ち向かう方法を合わせて教育する必要があることが明らかだ。

また、3カ国のユース参加者は、オンライン上の暴力に関する教育では、被害者/経験者の声と体験談を中心に据え、ハラスメントを経験している人びとが現実にいることを気づかせるべきだと感じた。

これと並行して、傍観者の介入がハラスメントを受けている人に与えるプラスの影響を強調することで、ユースに声を上げる勇気を与え、自分たちの行動が良い結果をもたらしていることを実感できるようにすべきである。また、群集心理に加え、ネットの匿名性によって介入することへの責任感がいかに希薄になってしまうかについての教育もユースは望んでいた。

オーストラリアとインドネシアの参加者たちは、傍観者のあり方はソーシャルメディア・プラットフォームによって異なるため、教材やプログラムもそれを踏まえて、一律のアプローチではなく、具体的に介入方法を示す必要があると述べた。

「学校は虐待やいじめの問題を「画一的」に捉えがちです。いじめに関する教育は周回遅れだと言われます。具体的な問題や用語について常に最新の情報を把握していることが重要です。」

— ユース、ピアフォーカスグループ参加者、オーストラリア

Girls Out Loud プロジェクトのために集まったネパールの女の子たち。彼女たちはオンライン上の暴力、女性のエンパワーメント、ジェンダー平等について話し合う講習会に参加した。
写真: Bishal Ranamagar



ユースは傍観者にどんな行動を望んでいるのか？

行動する傍観者のあり方はどのソーシャルメディア・プラットフォームを使うかによって大きく違ってくるが、共通点がある。

すべての国のユース参加者が強調したのは、標的になっている者を支援する際には、トラウマを考慮した対応が最良のアプローチとなり、そのためには彼らの経験を認め、支えとなり、次のステップに進むための選択肢を提供する必要がある。

：「私は、自分がそもそも何か悪いことをしている、だから自業自得なのだと感じるものが多かったの、ネット上のハラスメントになかなか立ち向かうことができなかった。もし誰かが、私のせいではない、ハラスメントは悪いことなのだ、と言ってくれたら弱気にならずに自分から声をあげられると思います。」

-ユース、オーストラリア(20~24歳)

また、加害者の暴力的または嫌がらせ的な発言に加わらないことで被害者を励まし支えることも、行動する傍観者にできる支援の1つだ。

傍観者が加害者と向き合うことを決めた場合、加害者の人格を攻撃すると状況を悪化させる恐れがあるため、加害者の言い分や行動を取り上げるのが最も良いアプローチとなる。

さらに、インドネシアとベトナムの参加者からは、傍観者は事情を理解したうえで、どのように介入すればもっとも良い形で被害者を支援できるかを決める必要がある、という意見が出された。

傍観者を支援する

傍観者が安心して他人のために立ち上がるためには、利用しているプラットフォームや法律によるサポートがあり、必要ときにメンタルヘルスサービスを利用できることが必要である。

ユースが自信を持って行動するためのセーフティネットを提供せずに、危険性をはらむ場所にユースが立つことなど、私たちは求めることはできない。

傍観者のためのリソース

オンライン上の暴力の標的になっている者と傍観者のためのリソースは詳細な設定機能の中に潜ませず、すべてのソーシャルメディア・プラットフォームで簡単にアクセスできるものでなくてはならない、とオーストラリアとインドネシアのユース参加者は述べた。また、こうしたリソースには、通報に関する情報や傍観者になる方法、メンタルヘルスサポートも含めるべきである。

インドネシアの参加者はこの考えをさらに発展させ、傍観者としてどのように心の健康に気を配るべきかが、教室での指導を越えて生活の中で話題に上るようになる必要がある、と指摘した。ベトナムの参加者は、傍観者を対象とした支援制度とともに、政府、NGO、市民社会組織などの組織が傍観者を保護する必要性を述べた。

指針

オーストラリア、インドネシア、ベトナムから参加したユースは、ハラスメントを容認せず傍観者と被害者を支援するオンライン利用に関する明確で利用しやすい指針の必要性を強調した。

また、言論の自由をめぐる議論を盾に指針を反故にできないよう、こうした指針は、言論の自由をめぐる議論に正面から向き合う必要がある。オンライン・ハラスメントについて利用者の多様な経験に対応できる利用しやすい法的保護と支援を整え、被害者/経験者と加害者双方に認知されるよう明確な情報伝達を行うこと。これらを求める声が、3か国すべての参加者から上がった。

提言

ユース参加者が提案し、データ分析から明らかになった提言を以下に挙げる。

ソーシャルメディア企業が行動し説明責任を果たすこと。そしてオンライン上で行動する傍観者の取り組みがさらに展開されること。オーストラリア、インドネシア、ベトナムから参加したユースたちは、ユースが望むオンライン空間をつくるためには、この両輪が必要であるとの意見で一致した。そのどちらが欠けても、オンラインGBVとハラスメントの問題を解決することはできないからだ。

傍観者に対する教育と支援

ユース参加者は、ユースが行動する傍観者となるためには、教育と指導が重要だとの見解を示した。

ユースがソーシャルメディア上の交流において行動する傍観者となることを後押しするカリキュラムとリソースの強化に向けて、私たちは具体的な提言を行った。

私たちは教育省に対し、以下の内容を含むデジタルリテラシー教育の実施あるいは改定を求める。

- オンライン・ハラスメントとGBVの実態
- 発生する理由と性差別、人種差別、年齢差別、同性愛嫌悪、資本主義などその根底にある原因
- 言論の自由とハラスメントの区別
- 加害者は誰か
- 行動する傍観者になる方法
- 通報または行動を起こす方法
- 行動する傍観者であることが、自身と被害者/経験者に与える影響

学習リソースの設計について、以下の提言を行う：

- すべての教材は、あらゆる多様性を持つユースと共同で設計する
- 被害者/経験者の声を中心に据える

傍観者の支援について、以下の提言を行う：

- 学校内でのメンタルヘルス支援は、オンライン・ハラスメントの影響下にあるユースと、傍観者として行動しているユースの両方に対応したものにす。
- 傍観者としてどのように自分の心の健康に気を配るべきかが、教室での指導を越えて社会生活の中で話題に上るようになるべきである。

より安全なオンライン空間の創造

ソーシャルメディア企業は、オンライン上の暴力とハラスメントを撲滅させ、行動する傍観者の取り組みをすすめる上で要となる指針とリソースを提供する重要な役割を担っているとの提言が、オーストラリア、ベトナム、インドネシアから全体を通して強く打ち出された。

私たちは、ソーシャルメディア企業に対して以下のことを求める。

- ・たとえば、LGBTIQ+の人や人種差別の影響を受けている人への支援など、オンライン・ハラスメントにある交差性の影響を受けている人たちに特化した、地域ごとの支援システムにソーシャルメディア企業がつなげるとともに、傍観者の情報へのアクセスを提供する情報拠点として機能する。提供するリソースには情報の通報、傍観者になる方法、メンタルヘルスサポートを含める。
- ・多様な経験を持つ人々(LGBTIQ+のユース、有色人種のユース、先住民のユース)にとって、より安全なオンライン空間を設計し、更新する。
- ・GBVとハラスメントを非難する際の言葉遣いと表現を改善する。
- ・より迅速な対応で透明性が高まるように通報機能を改善し、ハラスメントを報告する際に傍観者と被害者を支援する専門チームを設置する。
- ・GBVとハラスメントを行った結果どうなるかを説明し、それらを強く訴える。
- ・GBVとハラスメントを阻止するためのすべての方策を、あらゆる多様性を持つユースと協議し、共同設計する
- ・性差別、人種差別、同性愛嫌悪などの偽情報に関する投稿を検出する技術を活用する(ベトナム)。例 FacebookとInstagramのCOVID-19情報ハブ。
- ・コンテンツが掲載される前に、特定の単語の検閲やフラグ付けを行う。

法的保護

オンライン虐待のすべての傍観者と被害者が、施行された法的保護に容易にアクセスし理解できるようにするとともに、多様で親しみやすい法律の専門家にアクセスできるようにすることを提言する。

変革のアイデア

以下に記す変革のためのアイデアは、ピアフォーカスグループやワークショップ3での会話の中で生まれたものだ。これらのアイデアは、世界に求める変化を実現するためのキャンペーン案を打ち出す構想力が、ユースにあることを証明している。

- ・ 公開書簡を通して、ネット上のメディアと彼らが使用する「クリックベイト」表現が、いかにネット上のハラスメントが生まれる環境を作り出しているかを問いかける。
- ・ 言論の自由に関する啓発キャンペーン『言葉は傷つける』を通して、人やその存在を中傷することと言論の自由の違いを明確にする。「路上で言えないことが、インターネット上では言える訳ではない」
- ・ ソーシャルメディア・インフルエンサーとロールモデルは、ソーシャルメディア、テレビ番組、ニュース記事など、一般的手段を通じて、ユースに積極的な介入を呼びかけ、奨励すべきである。
- ・ 重要な情報、リソース、支援を独創的で魅力的なフォーマットで提示した傍観者ハンドブックを作成する。
- ・ デジタルリテラシーを教育に組み込むよう請願する。
- ・ ソーシャルメディア企業と協働でガイドラインを変更し、通報面を改善するとともに、支援へのアクセス方法に関する特定の機能を組み込む。
- ・ オンライン・ハラスメントの体験談を収集するためのデジタル・メールボックスを設置する。
- ・ GBVが起きる背景にインフルエンサーの存在がある場合も多く、インフルエンサーは必ずしもGBVを語るにふさわしい立場にあるとは言えない一方で、彼らには阻止する力もある。たとえば、「ユースがGBVについてインフルエンサーに知ってほしい5つのこと」のようなソーシャルメディアキャンペーンを通じて、彼らに話しかける。
- ・ 「It all starts from you(始めるのはあなた自身)」キャンペーン: キャンペーン重要なメッセージとして、GBVは誰かの簡単な行動で予防・阻止できること、一人が立ち上がることで他の人が後に続き、ユースがその一歩を踏み出す力を与えることに焦点を当てることができる。
- ・ オンライン虐待の被害者を中心に創造的な視覚的オンライン・キャンペーンを実施して、傍観者が介入していたらどうなっていたかについて話し合う。
- ・ 写真撮影会を開催して、オンライン・ハラスメントにおけるボディシェイミング (Body shaming、他人の容姿について否定的な発言をすること) に対する意識を喚起し、行動する傍観者が被害者に与える影響を説明する。

結論

このプロジェクトでは、その目的、同世代の仲間と議論するテーマ、変革のための提言、そして今後の前進に向けて行動を起こすためのキャンペーンを決定する際、私たちユースが主導権を握った。行動する傍観者の介入には、オンライン上のGBVを阻止する力があり、ソーシャルメディア企業の支援によって、オンライン空間の安全性は高めることができる。

「未来のオンライン」は、あらゆる多様性を持つユースのためのものであり、「未来のオンライン」を作り上げるのは、そうしたユースたちだ。それは私たちがありのままの姿で存在し、働き、学び、交流できる安全な世界。互いを思いやり、尊重し、何か問題があれば立ち上がるオンラインコミュニティである。

こうした未来は夢物語ではなく、実現可能なものだと、私たちは信じている。だが、私たちの声を増幅し、計画を実行に移すためには一人ひとりの決意が必要だ。待ち受けるこの未来を実現するために力を貸して欲しい。

今後の方向性

今後は、この報告書と未来のオンラインに向けた私たちのビジョン(構想)を、オーストラリア、インドネシア、ベトナムの教育省やソーシャルメディア企業を含む意思決定者に伝えていく予定だ。

私たちは、ユースとの協働やオンライン空間の安全性に携わる方々に、変革に向けた私たちの提言をご一考いただき、ユース中心の有意義なキャンペーンと行動を生み出す方法について検討していただきたいと考えている。さらに詳しくお知りになりたい方は、私たちにご連絡してほしい。

彼らの目指すオンライン環境を後押しする提言をすすめるため、私たちは報告書の発表と並行して、デジタル機器を使った語り聞かせとキャンペーン活動を実施する予定だ。

私たちのビジョンにご賛同いただき、未来のオンラインに向けて旅する私たちの後についてきていただきたい。

<https://www.plan.org.au/campaign/future-online>



エクアドルで携帯電話を使うユース女性。

調査方法

プロジェクトの目的

このプロジェクトを通じて、私たちは以下のことを目指した。

1. オンラインの世界でユースが抱える主な問題に対する意思決定者の理解を深め、安全で公平な包摂的オンライン世界の実現に向けた変化を生み出すために彼らを動かす。
2. ユース、特に女の子、ユース女性、多様なジェンダーの人々に、安全性の高いより快適なオンライン空間をつくる力を身に付けさせる。
3. あらゆる多様性を持つユース、特に思春期の女の子、ノンバイナリー、多様なジェンダーのユースに、オンライン空間の具体的な改善につながる提言とは何かを明確に捉え、開発し、主張するためのツールを提供する。
4. ユースが変革のための提言活動を強力にすすめられるプラットフォームを提供し、ユースを国・地域レベルの変革者・意思決定者となつげ、彼らにとって優先度の高い、政策や法律、社会変革の実施に向けたキャンペーンや提言活動をユースが行うという目的を持たせる。

アプローチ

プラン・インターナショナル・オーストラリア、インドネシア、ベトナムは、多様な生活経験を持つユースとパートナーが力を合わせて社会の最も複雑な課題に取り組む共同デザイン・コンサルティングの社会的企業であるYLabと協働して4つのワークショップを企画し、3カ国から26人のユースが参加した。このワークショップを通じて、ユース参加者は探究テーマを明確に定め、選択したデータ収集方法の研修を受け、データ分析とともに変革のための解決策とアイデアの考案を共同で行った。こうしたワークショップはそれぞれ、各国一人のユース調査者が行なったデスクレビューと初期データのコード化と分析に基づいて実施された。

ユース参加者は各国でのワークショップにも参加し、アクショングループをつくってプロジェクトの中核となるワークショップの合間にデータ収集、報告書作成、デジタル・ストーリー、プロジェクトのキャンペーン構成など具体的な作業に当たった。

制限事項

このプロジェクトでは、ピアフォーカスグループでの議論を実施する時間に限りがあったことが、大きな制約となった。実施期間は2週間で、同世代のネットワークが参加者募集の頼みの綱となった。このため、グループの典型例と言うよりはむしろ一例を示す内容で、参加したユースが属す集団に見られる価値観と見解を反映したものになっている。

ユースのセーフガーディング(安心・安全を守ること)

ユース中心のプロジェクトの実施は、子どもの保護、子どもの最善の利益を追求するプログラムと提言活動、そしてジェンダー・トランスフォーマティブ・プログラムとアドボカシー活動についてプラン・インターナショナルが定める指針にしっかりと則ったものだ。

このプロジェクトでは、参加者の安全、ウェルビーイング(幸せ)、エンパワーメントに焦点を当てた包括的なリスク評価が完了した。

継続的なインフォームド・コンセントは、セーフガーディングのきわめて重要な要素である。すべてのユース参加者は、そのプロセスと手順を正しく理解し、すべての決定と手順に参加および/または説明を受けた。参加者と接する際はその都度、データの目的と用途を明確に伝えた。18歳未満の参加者については、親/保護者の同意を得た。

テーマの性質上、プロジェクトチームは、参加者のウェルビーイングと提供可能な支援について定期的に振り返りを行い、人間の潜在能力に注目してその力を引き出すとともに、解決した状態に焦点を当てて解決策を探るアプローチを徹底した。

また、プロジェクト全体を通じて、相談機関への経路が明確に伝えられた。外部の支援機関についても詳しく説明され、参加者はプラン・インターナショナル・オーストラリアの子どもセーフガーディング本部に連絡することができた。

さらに、ユース参加者はピアFGDを実施するための準備として、ファシリテーター(進行役)の研修を受けた。この研修を通じて、子どもとユースのセーフガーディングについて深く理解することができ、相談機関への明確なプロセスを伝えつつ、より安心して安全な場の作り方と参加者に参加期間中の能力向上を実感させる方法を学ぶのに役立った。

謝辞

このプロジェクトとピアFGDに時間を割いて参加してくれた、あらゆる多様性を持つすべてのユースに感謝する。

ユースチーム報告書作成者
Elizabeth Payne

ユースコンサルタント
Nguyen Huy Ha Anh
Nguyen Thi An Giang
Tran Le Khanh Huyen
Elizabeth Payne
Ananda Zhafira
Imogen Senior
Maya Musa

プロジェクトチーム
プラン・インターナショナル

Duong Phuong Anh (Vietnam)
Tran Huu Phuong Anh (Vietnam) Robert
McKechnie (Australia) Pasanna Mutha-
Merennege (Australia) Kate Phillips
(Australia)
Aashna Pillay (Australia)
Aditya Septiansyah (Indonesia)
Joy Toose (Australia)

YLab

Chelsea Lang
Ope Olubodun
Lien To

その他の寄稿者

We thank everyone who contributed to the report and this project in any way.

We'd also like to thank The Body Shop Australia for their ongoing commitment to empowering young women and helping to raise up their voices, by supporting the 2021 Youth Activist Series program and the production of this project.

画像

すべての写真 © Plan International

2021年9月発行

参考文献

- Australian Human Rights Commission (2013) Cyberbullying and the Bystander: Research Findings and Insights Report. https://humanrights.gov.au/sites/default/files/document/publication/bystanders_results_insights_report.pdf より引用。
- Brody, N., & Vangelisti, A. L. (2016). Bystander Intervention in Cyberbullying. *Communication Monographs*, 83(1), 94–119. <https://doi.org/10.1080/03637751.2015.1044256>
- Joint Select Committee on Cyber-Safety. (2011). High-Wire Act Cyber-Safety and the Young. https://www.aph.gov.au/parliamentary_business/committees/house_of_representatives_committees?url=jssc/report.htm より引用。
- Mazzone, A. (2020). Bystanders to Bullying: An Introduction to the Special Issue. *International Journal of Bullying Prevention*, 2(1), 1–5. <https://doi.org/10.1007/s42380-020-00061-8>
- Moxey, N., & Bussey, K. (2020). Styles of Bystander Intervention in Cyberbullying Incidents. *International Journal of Bullying Prevention*, 2(1), 6–15. <https://doi.org/10.1007/s42380-019-00039-1>
- Patterson, L. J., Allan, A., & Cross, D. (2016). Adolescent bystanders' perspectives of aggression in the online versus school environments. *Journal of Adolescence*, 49, 60–67. <https://doi.org/10.1016/j.adolescence.2016.02.003>
- Powell, A., & Henry, N. (2015). Digital Harassment and Abuse of Adult Australians: A Summary Report. RMIT University. <https://www.parliament.nsw.gov.au/lcdocs/other/7351/Tabled Document -Digital Harassment and Abuse of A.pdf> より引用。
- Quirk, R., & Campbell, M. (2015). On standby? A comparison of online and offline witnesses to bullying and their bystander behaviour. *Educational Psychology*, 35(4), 430–448. <https://doi.org/10.1080/01443410.2014.893556>



The charity for
girls' equality



THE BODY SHOP

私たちには夢がある。彼女には計画がある。

私たちは、女の子の平等を目指す団体である。私たちは貧困の根本原因に取り組み、危機に瀕したコミュニティを支援し、ジェンダー平等を求めるキャンペーンを展開し、政府が子ども、特に女の子にとって適切なことを行うよう支援する。私たちは、より良い世界は実現可能だと信じている。平等な世界、それはすべての子どもが幸せで健康的な生活を送れる世界、そして女の子が対等な立場で適切な生活を送れる世界だ。

PLAN.ORG.AU **13 75 26**

Plan International Australia
18/60 City Road, Southbank VIC 3006
GPO Box 2818, Melbourne VIC 3001
Tel: 13 75 26 Fax: +61 (3) 9670 1130
Email: info@plan.org.au

ABN 49 004 875 807

 /planaustralia

 @PlanAustralia

 @plan_australia

国を尊ぶ心

本報告書の執筆に関わったオーストラリアのスタッフは、この国の過去・現在・未来の年長者たちに敬意を表し、謝意を表す。私たちは、主権が決して譲り渡されたわけではなく、この土地は常にファーストネーション(先住民)の土地であり、これからも先住民の土地であると認識している。私たちは、彼らの土地、水、コミュニティとの継続的なつながりを認め、継続的な学習、深く積極的な傾聴、そして連帯のための行動を約束する。